

Nicolai de Cusa Opera Omnia :

X-2b *Tu quis es* <*De principio*>

(Felix Meiner Verlag, 1988, xv+88 p.)

XI-1 *De beryllo*

(Felix Meiner Verlag, 1988, xxxv+148 p.)

XVII *Sermones* II (1443-1452) Fasc. I,

*Sermones XXVII-XXXIX.*

(Felix Meiner Verlag, 1983, 118 p.)

## 八 卷 和 彦

ニコラウス・クザーヌスの全集は、1932年以来ハイデルベルク大学学術アカデミーの手で校訂されつつ刊行されているが、最近新たな段階に入ったように思われるので、ここで近年に出版された三点を材料にしつつ紹介してみたい。

第Ⅰ巻 *De docta ignorantia* 刊行以来既に50年を越える歳月の中で、クザーヌスの哲学的著作は、*De visione dei* を除いてほぼ出版されており、「今後の課題は彼の神学的著作の刊行である」というのが、トリアのクザーヌス研究所の所長ハウプスト教授の言である。ここに取り上げる三点を全体として見る時、まさにそのような、クザーヌス研究が到達した現段階を如実に示すものとなっている感がある。つまり、最初の *Tu quis es* <*De principio*> は、そのドイツ語訳が既に出版されたことがあるものの、そのテキストは今回初めて校訂版として刊行されたのである。次の *De beryllo* は、つとに1940年 L. Bauer の校訂により刊行されたことがあるが、その後の研究の進展の成果を踏まえて今回改善された形で再び刊行されたものであり、最後の *Sermones* は、長い年月にわたる綿密な研究の成果として、説教のなされた日付等のデータを備えて、全く初めて出版されたものである。

以下簡単に各巻を紹介してみよう。先ず *Tu quis es* であるが、興味深いことには、クザーヌスが1459年6月に執筆完成したこの短い著作のタイトル、そしてクザーヌスの思考の出発点は、新約聖書 ヨハネ 8・25のヴルガータにおける、いわば「誤訳」

に基づくものであることが指摘されている（この本のドイツ語訳 *Nikolaus von Cues, Über den Ursprung* (Heidelberg 1967) の訳者 M. Feigl による Einführung, S. 14). つまり, *οὐ τίς εἶ; εἶπεν αὐτοῖς ὁ Ἰησοῦς· τὴν ἀρχὴν ὁ τε καὶ λαλῶ ὑμῖν* における *τὴν ἀρχὴν* を文字通りに principium として, また *ὁ τε* を前置詞の *ἐτε* として解釈したことにより, 'tu quis es? Respondit eis Iesus: Principium, qui et loquor vobis.', とされた, その「Iesus・Principium」からクザーヌスは自己の思考を展開しているのである. しかしこれは決してつまらない誤解という訳ではない, クザーヌスのキリスト教信仰は極めて強くキリスト中心的であり, さらにその「キリスト像」はほとんど常にヨハネ福音書のそれを基にしているからである. つまりクザーヌスの思想的営みのまさに核心に由来して, 彼はこの箇所を手掛かりとしたのである.

この著作において, 彼はイエスを万物の Principium (根源・始め) として, テーマである神認識について説く. その際にプロクロス『プラトン・パルメニデス註解』の思想を, とりわけその〈一〉の思想を中心に据えて, authypostaton の概念についての解釈から始める. そしてその〈一〉とは他ならぬキリストのことであり, それは結局三位一体における神のことであるとする. そして, その神が, キリストを通じて万物に語りかけている, それが principium として語りかけるイエス・キリストであるのだ, と締め括っているのである.

この校訂本は従来知られていた4種の写本に加えて, つい最近1986年にトリアの K. Reinhardt 教授がスペインのトレドで発見した写本をも用いて成立したものである. 巻末には, 詳細な脚註に関する著者, 著作のインデックス, および語彙のそれをも備えており, 研究する者にとっては便利である.

次に *De beryllo* (緑柱石について) は, 1458年8月に著されたものだが, 1453年以来の教会・修道院改革, およびそれに伴う世俗領主との抗争に忙殺されていたクザーヌスが, ようやく手に入れた束の間の静けさの中で年来の課題を果たす形でまとめられたものである. 彼と親交を結んでいたバイエルンのテューグレンゼーの修士たちの長年にわたる願いに応えて, 人間の神認識への希求および, 彼の思考の核心の一つであり, 同時に躓きの石でもある coincidentia oppositorum (反対の一致) について分かり易く説くというのがそのテーマである. 片面を凸形に, 反対面を凹形に磨いた一片の beryllus (緑柱石) を用いると (つまり凸レンズを用いると), 肉眼では見ることができなかつたものが見えるようになる. (ちなみに「眼鏡」はドイツ語で Brille

であるが、それはこの beryllus に由来する。) それは、凸形と凹形という互いに反対のものが一片の beryllus において一致しているゆえに可能となったことである。それと同様に、知性的な beryllus、つまり coincidentia oppositorum を用いる時に、理性的能力ではとらえられない神も初めて認識される手掛かりが得られると、随所に幾何学的な補助手段をも用いながら説いている。論は、上の *Tu quis es* の場合と同様に、プロクロス『プラトン・パルメニデス註解』の〈一〉の思想を前提として構築されている。即ち、万物の根源は〈一〉であり、それは intellectus と名付けられ、それが自身を啓示するために、それから万物が進み出ているのである、とされている。そして、coincidentia oppositorum の意味と共に、それを用いるとわれわれが一なる神にどのように触れうるか、をも説き明かそうと努めている。そして最後に彼は、この本自体が、神へと到るための一つの beryllus のような補助手段となりうるだろう、と締め括っている。

また方法論として興味深いことには、クザーヌスはこの著作以降、しばしば神探究の過程を、また神認識の成立を説明するのに、この beryllus の場合のように、身の周りの具体的なものを材料に用いるのである。例えばほとんど最晩年である1463年の著作 *De ludo globi* (玉遊びについて) がある。ここには、クザーヌスの長年にわたる実践的活動の経験に基づく工夫が伺えると同時に、彼にとっては神の apparitio である現実世界への彼の絶えることのない強い関心をも見てとれることもできるだろう。

今回新たに出版された版は、Bauer 校訂のものに比べて、脚註が大幅に充実しており、それに伴って、巻末のインデックスも充実した。また巻末には重要項目についての注釈も新たに付けられている。それによって、例えば、beryllus というものについての西洋の思想伝統における知識およびその意味付けを詳しくたどることができる。しかし、語彙索引が付いていないのは、惜しまれる所である。

最後に *Sermones* を紹介したい。クザーヌスの説教は総数 300 篇を超える膨大なものであるが、その内容はしばしば思弁的に過ぎて説教としてはつまらない、難しすぎると、彼の生前から不評であったことは、彼自身も認めているほどである。しかし見方を変えるならば、この事実はわれわれに、クザーヌス研究について重要な手掛かりを与えてくれることをも意味する。つまり、彼の説教は、決して単に司牧的目的および司牧的手段によってのみ構成されているのではなく、むしろ極めて哲学的なそれを持っていることになるからである。実際にもその通りであって、われわれが彼の説教

を、彼の哲学的著作と併せて考察してみるならば、その理解がいっそう容易になり、またいっそう行き届くのである。

さらに、説教との総合的考察が意義深い点は、彼自身の教会での地位に従って残されている様々な資料から、彼の説教の日付がかなり細かく確定されるので、説教を哲学的著作と比較するならば、彼の思考の深まりの道筋をかなり如実に跡付けることが可能であることである。

特に今回刊行された巻は、クザーヌスが *De deo abscondito* を始めとする三部作、および、それに続く様々な著作を執筆していく時期、つまり彼の思索的営みの頂点の一つと称ぶこともできるであろう時期と重なっている年代の説教であるから、この研究は今後不可欠となるであろう。

さて、この膨大な説教については、つとに J. Koch が全体にわたって研究して、そのなされた日付の設定をおこなった (*Untersuchung über Datierung, Form, Sprache und Quellen. Kritisches Verzeichnis sämtlicher Predigten. Cusanus-Texte I 7*, Heidelberg 1942)。しかし、彼一人での仕事にはやはり限界があり、その後の R. Haubst らの研究によって、コッホの研究はしばしば誤りを含んでいることが明らかになっている。このような新たな研究の成果に基づいて、R. Haubst らによって、1970年以来刊行されているのが、この全集の XVI 巻から XVII 巻にわたる校訂版である。これは、他の著作と同様に詳細な脚註を備えており、さらに一定の期間ごとにまとめて調べられた詳細な語彙索引と、そのクロス・レファレンスも出版されるので、研究者には大いに有益である。(ちなみにXVI巻全体にわたるそれは、XVI, Fasc. 0として今年中に刊行される。さらに今紹介した *Sermones* に続くものは、XVII, Fasc. II, *Sermones XL-LV* として、1990年中に刊行されるとのことである。

最後に、クザーヌス中期の最大の著作である *De visione dei* の校訂版の一日も早い刊行を待ち望みつつ、この簡単な紹介を終えたい。